放送番組センターレポート
BROADCAST LIBRARY Report
2013.7
No.15
http://www.bpcj.or.jp/
（公財）放送番組センター
〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110

TOPICS 今号のトピックス

■永六輔が語る　ラジオからテレビへ テレビからラジオへ
■公開セミナー　第35回名作の舞台裏『マークスの山』
■「市川森一・上映展示会」長崎に巡回
■定時評議員会で平成24年度事業報告ならびに収支決算を承認

■永六輔が語る　ラジオからテレビへ テレビからラジオへ

■公開セミナー　ラジオを楽しむ!第2弾

昨年度からスタートした公開セミナー「ラジオを楽しむ」の第2回は6月2日に、長年、放送に深く関わってきた永六輔氏に、昭和20年代から現在までの放送でのエピソード、ラジオ番組やラジオへの思いなどたっぷりと伺った。会場は千代田放送会館(東京都・千代田区)、事前に1000名を超える応募があった。当日も240席が満席。セミナーでは、永氏が関わったラジオの音声やテレビの映像を交えながら進行した。

[登壇者]　永　六輔（放送タレント）
　　遠藤泰子（フリーアナウンサー）
[司　会]　石井　彰（放送作家）

セミナー冒頭、ラジオ『日曜娯楽版』(1947～54／NHK)の音声が流れる。永氏は中学生の時に、この番組の面白さに魅了され、毎週、ショートコントを書いて投稿していた。「テレビはない、ラジオしかない。民放もない、NHKのラジオしかない。娯楽が何にもない時代だから、日本中の人が聴いていた。コントが当選すると当時のお金で500円貰えた。」と永氏が懐かしむ。「僕のコントが使われるようになり、三木鶏郎さんに“一度NHKにいらっしゃい。出来ればスタッフに入って欲しい”と言われた。中学生の僕を、三木さんは大人だと思っていたんですね。そこから放送に関わる事になった。」「僕が『娯楽版』のスタッフに入った時は、ラジオの内容を全部GHQがチェックしていた。その当時、沖縄はカリフォルニア州オキナワで沖縄県じゃないんです。まだそういう時代でした。」その後、『日曜娯楽版』は、政府を批判したという事で放送中止になってしまう。

「その頃、電波が飛んできて絵になるんだぞという事を聞き始めたんです。今にラジオが見えるようになるらしいと。」永氏は、テレビの実験放送にもいくつも関わった。「当時は照明がものすごく暑くて大変だった。何色がいいか調べるためにいろんなドーランを塗って試したんです。僕が最初に黒柳徹子に会った時は、顔にまだらにドーランを塗っていた。当時、何色が感受性が強いかというモデルを放送劇団の新人の黒柳君などがやっていたのです。」

永氏が構成に参加した、日本テレビの『光子の窓』(1958～60／日本テレビ）の映像が流れる。永氏は「カメラが何台もないので、前のスタジオから次のスタジオへ皆でカメラをお神輿みたいに運び込んで、その間はタイトルで延ばしておいて、次に繋ぐ。それを毎日やっていた。」と当時を振り返る。

その後、60年安保の時代に突入。安保反対のデモが盛んになり、永氏は台本を書いている場合ではなくなった。「番組と安保とどっちが大事なんだと言われたから、安保が大事だと言ったら、それでは君はもういらないとクビになった。そこでNHKの『夢であいましょう』が出来るようになるんです。」

『夢であいましょう』（1961～66／NHK）の映像が流れる。（この番組からは、『上を向いて歩こう』（作詞:永六輔）ほか、多くのヒット曲が生まれた。）「今、久しぶりに映像を見て、懐かしいというよりも、びっくりしたのは、坂本スミ子とか朝丘雪路とかは1枚タイトルなのに、渥美清、黒柳徹子、E・Hエリックは3人で1枚。そういう待遇だったんですよ。でも、みんなよくやった。若いからというのと、もう一つ無名だったから。中嶋弘子さんも全くの素人で洋服屋さん。洋服屋さんをスタッフに入れておけばいろんな洋服を持ってこられるなと（笑）。」

1967年から、今も続くTBSラジオの長寿番組『永六輔の誰かとどこかで』がスタート。遠藤氏は、当時入社したてのアナウンサーだった。「入社して8か月。12月に永さんの番組が始まり、CMに新人を付けて欲しいとアナウンサー部に要請がきて、たまたま私が行ったんです。最初はCMだけ読んでいたら、ある時、アシスタントの方がお辞めになり、永さんが私を呼び出されて、誰でもいい、縫いぐるみでもいい、前に誰かいて、ただ笑ってくれていればいいから、と言われた。以来46年間、笑っているだけという珍しいアナウンサーです。」と遠藤氏が名コンビ誕生の想い出を語った。更に、永氏が番組への思いを語る。「民俗学者の宮本常一さんに“放送の仕事をするのだったら、電波は何処へでも飛んでいっている、そこへ行ってものを考えろ。電波が飛んで行く先に行って人の話を聞き、それをスタジオに持って帰ってくる。スタジオでものを考えるな”と言われた。それを自分の番組の中で通そうと思い、必ず何処かへ行って、必ず誰かと会っていた。」（『永六輔と誰かとどこかで』は放送12500回を超えた。）

1960年代後半、大学闘争などが起こる中、ラジオでは深夜放送が始まる。永氏も遠藤氏も、1969～71「パックインミュージック」を担当。永氏は、この番組の中で様々な事を試みる。ある時は、憲法の全文を読み切った。「2時間切るかと思ったら2時間ちょっとかかりましたね。“ゼンブン”って、前の文じゃないですよ。全部です。」また、自分が死亡したという想定で番組を放送。「永六輔が旅先で死んだと流したら、警察から“旅先で死んでいるのだったら遺体があるに違いない。その遺体はどうなっているのか”とTBSへ問合せがきた。“あれは冗談です”と言ったら、“放送で冗談はやるな”と。でも、あれは有難かったですね、意外な人が弔辞を読んでくれて。本当は嫌われてないんだという事がよくわかった。」と永氏は笑う。また、当時の深夜放送は全国の若者から山のようなハガキが届いた。遠藤氏は「深夜に“みんなで歩きましょう!”と呼びかけたんです。深夜ですよ。そうしたら何百人か集まっちゃったんですよ。あの熱気は今思い出しても嬉しかったと同時に怖かったですね。」と振り返った。

『誰かとどこかで』をテレビにしたのが『遠くへ行きたい』（1970～／読売テレビ・テレビマンユニオン）。永氏が出演している第1回の映像が流れる。演出は今野勉氏。今見ても斬新な映像に目を奪われる。永氏は、『遠くへ行きたい』に出演しながら『土曜ワイドラジオTOKYO』も1970年に始まる。遠藤氏が「8時間。朝から夕方まで放送していた。」と振り返る。石井氏も「即席ラジオ聴取率調査。久米宏さんが団地に行き、“今、永さんの番組を聴いている人は手を出してください”とやっていた。この数字が結構ちゃんとしていた。」と懐かしむ。永氏は、この8時間の『土曜ワイド』が終わるとすぐ旅に出て、次の『土曜ワイド』までに帰って来た。永氏が「今、疲れているのがわかるね。」と笑いを誘った。

「ばらえてい テレビファソラシド」（1979～82／NHK）の映像が流れる。この番組で、永氏はNHKの女性アナウンサーを司会に起用。「当時、女性アナウンサーはバラエティに出てこなかった。有能な人がいっぱいいるのに。女性のアナウンサーというのは、女がニュースなんか読むな、女がスポーツをやるな、というような事が通っていた。」と永氏が振り返る。また、永氏は、加賀美アナウンサーがその日のニュースを生で読む際、『お母さんはもうすぐ帰るからね』という言葉を原稿に入れた。永氏は「NHKのアナウンサーは、訓練が出来ているから、あれっ?と思わない。そのまま原稿を読んじゃったあとに、みるみる真っ青になっている。そういうのを生放送で読んじゃった事に関してね。そういう悪い悪戯をしました。加賀美ちゃんには後々までも恨まれていました。」と懐かしむ。

永氏は80年代の中盤位からあまりテレビには出なくなる。永氏が、ラジオやテレビへのいくつかの思いを語った。「放送局は3月11日に地震があった直後から放送を自粛しちゃった。『誰かとどこかで』も放送しない。笑ったり陽気な話をしている場合ではないと自粛していた。そのあとで“永さんは元気に喋っている。それがいかに大事だったか、永さんわかりますか?”と言われて、なるほどと思った。周りはひどい状況になっているが、永六輔は相変わらず喋っている。日常生活に戻れるという。そのほっとするさまを放送局はわかってないと言われて、まさにその通りだと思った。」「ラジオは日常生活の中に組み込まれている音の波なので、自分に相応しいと思う。テレビに出て褒められるより、ラジオに出て“この間の話良かったですよ”と言って貰える方が嬉しい。」更に「よく災害が起きたらラジオと言う。でも、災害の時にラジオが聴けるのは普段聴いている人。災害だからラジオを聴くのではなくて、ラジオも普段聴いている、テレビも見ている、映画も見る、芝居も行く、というバランスを大事にして欲しい。特にテレビのディレクターやプロデューサーは小さい劇場へ行ってない。探しに行って欲しい。人に会いに。この人を使うからみんな使おうというのではなくて、自分で自信を持って、自信を持った場所、自信を持った人を探してください。」と締めくくった。

会場は永氏の軽妙な語り口に終始笑いに包まれた。来場者からは「貴重なお話しに感動した。」「時が経つのを忘れるほど楽しかった。」など、たくさんの感想を頂いた。伝える事の大切さ、永氏の放送への想いを改めて感じる90分だった。

■公開セミナー　第35回名作の舞台裏『マークスの山』

4月20日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、警察小説の最高峰と言われる高村薫の直木賞受賞作をドラマ化した、連続ドラマW『マークスの山』(WOWOW)を取り上げた。

[登壇者] 上川　隆也(出演) 水谷　俊之(監督)
青木　泰憲(制作)
[司　会] 渡辺　紘史(放送人の会)

「名作の舞台裏」で、WOWOW作品を取り上げるのは2回目。今回は『マークスの山』に限らず、WOWOWのドラマの作り方、目指している方向などが語られた。

この作品のきっかけを青木氏は「WOWOWのドラマは2003年に2時間枠でスタートし、2008年から連続ドラマを作る事になり、主に40～60代位の大人の方向けにドラマを作っています。『マークスの山』は、制作会社から話を貰い、すぐにやりたいと思ったが、映画に一度なっており、2時間ドラマだと似てしまうので、なかなか企画が通らなかったのです。連続ドラマを始めた時、連続物であれば映画とは全く違う形に出来るという事で新たに構成を考え直し、提案して実現しました。」と振り返る。監督を引き受けた水谷氏は「原作は大好きなので、映画も見ており、2時間でこの作品を形にするのはどんなに大変かというのを感じていました。高村さんの原作は、組織と個人、原罪、孤独がどう癒されるかなど、其々のテーマが全部濃密に描かれている。120分の中でそれらを表現するのは無理だと思う。その要素をある程度きちんと表現するならば、120×3の分量、つまり、5、6回位の連続という枠があれば出来るかもしれないと思った。」と語った。また、青木氏は「映画より絶対面白くする事を条件に提案したので、映画に似ないようにと凄く考えた。暗い山からではなく、明るい山から入る。また、映画とは違い、現代版でやらなければ意味がないと思いました。」と加えた。

青木 泰憲

合田雄一郎という刑事役について上川氏は「僕の印象では彼一人が突出しているという受け止め方ではなかったんです。描かれている物語は捜査一課の中での話。勿論、主人公なので、フォーカスは当たっていきますが。とにかく脚本に忠実に、一人間として演じる事に専念しました。また、監督が合田という人間を、過去もあって、愛した女性もいて、心の傷も抱いていて、というような人間として描いていく事に重きを置いていると受け止めて役に臨んでいました。」と語った。

合田のトレードマークの白いスニーカーについて、青木氏が原作者の高村薫に聞いた所、特に理由はなかった。ドラマでは合田が理由を言った方が良いと思い、水谷が撮影現場でセリフを考えた。“靴を洗いながら事件の事、捜査の事を考えているのが好きなんだよ”と。青木氏は「上川さんが靴を洗っていると本当に考えているように見えるんです。」と笑った。

地上波とWOWOWに出演する時、意識は違うかという質問に上川氏は「どっちが良いどっちが悪いという事ではなく、スポンサーの有無などのフィールドの差を楽しんでいるという感じですかね。白黒フィルムしかない時には、白黒フィルムでの表現があり、そこに豊かさも情緒も、もしかしたら色彩も盛り込める。カラーで撮る時にはカラーでこその自由があるというような、その表現をする時のツールの違いでしかないと思います。」と答えた。水谷氏は「高村薫さんの原作をドラマ化するという事は、20～30年前の地上波であれば可能だったのではと思うが、今は難しいような気がします。横山秀夫のドラマ化は出来ても、高村薫のドラマを引き受ける覚悟がある地上波の局はなかなか無い。それは地上波が悪い訳ではなく、様々なニーズによって成り立っているので、そういうものを求める人が求める場所で作っていけば良い。そこにピタッとWOWOWがはまったのだと思う。」と話す。

水谷 俊之

企画を立てるポイントについて青木氏は「WOWOWでは、映画よりアメリカのテレビシリーズの方が人気がある。それらを楽しむ人には、どんな日本のドラマを作ると喜んで貰えるのかを研究してきました。」と語った。

様々な刑事役の演じ分けに苦労はないかという会場からの質問に対し上川氏は「脚本に描かれている背景、人物像、人間関係、それぞれ違いますので、僕の中では全く別人格として成立しています。『マークスの山』も脚本というものを何よりも太い線として捉えて演じ、僕を通して形になった人物があの形になったので、原作を愛している方々にとっては、合田像が違っている事があるかもしれませんが、僕自身はそこには拘泥していません。まず脚本の上に立ち、足せるものは有難く足し、捨てるべきものは惜しくても切るという思い切りが必要な作業なのかなと受け止めています。」と演技に対する真摯な思いを語った。

上川 隆也

■「市川森一・上映展示会」長崎に巡回

昨年12月～本年2月にかけて放送ライブラリーで開催した「市川森一・上映展示会～夢の軌跡～」を、市川森一氏が名誉館長を務めた長崎歴史文化博物館（4／6～5／26）と市川氏の故郷、諫早市立諫早図書館(6／21～7／25)にて開催した。長崎歴史文化博物館のオープニングには、関係者、招待客を始め300名近くの方々が集まった。地元長崎を愛し、長崎を舞台にした作品も多数執筆している市川氏。期間中、来場者からは「長崎で開催して頂いた事、感謝します。」「同県人の市川先生の業績がよく分かりとても良かった。」「多くの皆様からの市川先生へのメッセージを読んで、市川先生のお人柄が伝わってきました。」「市川先生の優しい笑顔が思い出されます。」など、長崎ならではの多くの感想が寄せられた。続く、6月からは、故郷・諫早にて開催。放送ライブラリーでは、この諫早開催に合わせて、地元から強い上映希望があった、諫早を舞台にしたドラマ『親戚たち』(1985・フジテレビ）を公開番組に追加。地元での全13話の上映が実現した。主演は、諫早出身の役所広司さん。初日の『親戚たち』第1話上映前には、市川森一夫人の美保子さんよりご挨拶を頂いた。上映会場には、140名のお客様が集まり、同番組を鑑賞。28年前のドラマの中の、今では変わってしまった風景、今も変わらない店や町並み、諫早公園の眼鏡橋や本明川などの映像に「懐かしい。」「28年前に見た。昔を思い出した。」などの声が上がり、会場全体が上映を心より楽しんでいる空気が伝わってきた。上映後、「市川さんほど地元を愛してくれた人はいない。」と市川氏への思いを語る来場者の姿もみられた。

■4月～8月開催、その他イベント

4／12～5／19、各局の協力を得て、恒例の「春の人気番組展」、続く5／22～28、「NHK大河ドラマ『八重の桜』全国巡回展」（主催：NHK横浜放送局）を開催した。夏休みには、「『フランダースの犬』と世界名作劇場展」を開催する。また、例年同様、夏休み中の子供向けに、親子出前授業（テレビ朝日）、日テレ体験教室、アナウンサー体験教室（NHK、フジテレビ）、ラジオ・DJ体験教室（FMヨコハマ）も開催する。

■定時評議員会で平成24年度事業報告ならびに収支決算を承認

5月23日に、第1回事業運営委員会と第1回番組保存委員会が開催された。事業運営委員会では、平成24年度事業報告・収支決算を審議し、原案通り理事会に諮ることが承認された。

番組保存委員会では、平成25年度保存対象番組の選定要領、選定のスケジュールなどを審議し、了承された。

5月31日開催の第1回理事会では、平成24年度事業報告・決算が諮られ、いずれも原案通り承認された。また、定時評議員会の開催を承認、事業運営委員会と番組保存委員会の審議内容報告が了承された。

6月20日開催の定時評議員会では、第1回理事会の承認を経た平成24年度事業報告・収支決算が諮られ、いずれも承認された。

［平成24年度事業報告および財政運営の概要］

平成24年度は、当センターが公益財団法人に移行した最初の年度であり、内閣府認定法人として事業を全国に展開していくことを重点事項とした。番組公開は、一般の方だけではなく、放送関係者による利活用も推進した。さらに、公益財団法人への移行を機に、中長期的な視点に立ち、今後の事業と財政のあり方を検討するための委員会を設置して協議を重ね、「向こう5年間の事業方針」を策定した。

法人運営は、基本財産運用益を改善するため、最近の債券市場の動向を踏まえ「財産管理運用規程」を一部改定し、基本財産の運用利率を年度当初の1.6%から年度末には、2%超に向上させた。

■BL・クリエーター支援サービス利用状況

昨年9月15日の運用開始から本年6月30日までの利用状況は、次のとおり。

◇配信番組：テレビ番組2,733本、ラジオ番組744本

◇利用登録者　435人（90社）

◇視聴実績　テレビ番組　705回、ラジオ番組　88回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員の利用を促進していく。本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで（TEL:045-222-2881）。

［放送番組センターレポート］は事業の現況をお知らせする内容で、年間4回発行する放送番組センターの機関紙です。